

松河戸・宇田様式の再編

● 赤塚次郎・早野浩二

これまで具体的内容が不明であった松河戸様式後半期から(仮称)宇田様式までの土師器の編年を提示する。まず志賀公園遺跡における良好な一括資料を主に用いて時期区分を行い、画期を導き出した。そのうえで松河戸Ⅱ式を2段階に区分し、後続する様式を宇田Ⅰ・Ⅱ式、儀長式として再編する見通しを得た。さらに須恵器編年との関係についても整理した。これらは5世紀の社会像をえがく大きな足がかりとなる。

はじめに

1994年、『松河戸遺跡』の報告書のなかで、「松河戸様式」を提唱した経緯がある^{※1}。松河戸様式とは一言で述べると、廻間Ⅲ式に後続する濃尾平野低地部の土器様式であり、S字甕D類と屈折脚高杯に代表される土器群によって構成される土器様式といえる。しかしながら、松河戸遺跡そのものが濃尾平野低地部に含まれていない点から、S字甕などの基本器種の土器組成そのものに問題点が内包されていた。さらに加えて、屈折脚高杯そのものの系統性が不明瞭であり、未だにその方向すら定かになってはいない。また小地域的な変化の様相や詳細な技法の研究等は進化していない。一方でS字甕D類については、高木洋のS字甕形態モデルの研究^{※2}などから、分類基準の見直しが提示された。また村木誠はS字甕D類を中心とした松河戸式を「S字甕の衰退」と呼び、S字甕D類の製作と分布に廻間様式との明瞭な違いが存在する点を強調した^{※3}。

分類もそうであるが、様式の設定に当たって最も重要で心がけている点は、その全体性であるイメージ性「志向性」と考えている。これを曖昧や主観的と見るむきもあるが、むしろ主体的な様式設定であると思っている。こうした視点から見れば、「S字甕の衰退」は松河戸様式が内包しているイメージそのものにすぎない。また組成的な問題や分布は、地域性や遺跡、さらには遺構の性格や保存環境等に大きく作用される点と言うまでもなからう。今一つ加えるとすれば、新しい土器のデザイン(構造)や変化は、究極的には模倣という単純な行為に基づくものと考えている。つまり「行き当たりのいい加減なコピー」が、その原点でもある。型式学に基づく分類や組成研究からは文化を見

通す基本的な視点が見えにくい。この点については別稿であらためて論じたい。

さて松河戸式、特にⅠ式後半期とⅡ式の土器組成は、極めて不安定であった。Ⅱ式の設定に三重県地蔵僧遺跡^{※4}を担ぎ出した点から見ても苦肉の策といえよう。そこで今回は、志賀公園遺跡^{※5}の良好な一括資料を機軸にし、松河戸Ⅱ式から仮称「宇田式」への土器組列の変遷を具体的に提示することを目的にする。つまり濃尾平野低地部の5世紀の土器編年である。

1 問題点の整理

さて、松河戸・(仮称)宇田様式を再考するにあたって、それぞれの問題点について整理しておく必要がある。ここではとくに不明な点が多い松河戸Ⅱ式以降を問題とする。

松河戸Ⅱ式については、「松河戸様式の提唱」当時における必然的な資料的制約から、様式設定そのものが地蔵僧遺跡の土器群の代替に多くを負うという根幹にかかわる問題がある。しかるに、松河戸Ⅰ式から松河戸Ⅱ式1段階、2段階を通じての変遷の指標は、宇田型甕の出現とその数量変化以外には薄弱との感を抱かざるをえなかった。事実、松河戸Ⅱ式は「松河戸Ⅱ式1・2段階」と一括りにして援用される場合が多い。またその援用の多くは、赤塚が「松河戸Ⅱ式2段階」の指標とした小型壺の増加や宇田型甕の増加など、より認識されやすい器種構成や型式群の相対的な変化を挙げている。松河戸Ⅰ式と松河戸Ⅱ式の様式差がそもそも何に根差したかが不安定であることの表れであろう。

次に宇田様式について。松河戸Ⅱ式2段階に充てられた松河戸遺跡S K 07^{※6}と、それに後続する宇田様

※1 赤塚次郎 1994「松河戸様式の提唱」『松河戸遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

※2 高木洋 1998「濃尾出土のS字甕形態モデルの作成(1)」『土器・墓が語る』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会

高木洋 1999「濃尾出土のS字甕形態モデルの作成(2)」『美濃の考古学』第3号 美濃の考古学刊行会

※3 村木誠 2000「尾張台地におけるS字甕の衰退」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局

※4 倉田直純 1978「地蔵僧遺跡発掘調査報告」(亀山市埋蔵文化財調査報告Ⅰ) 亀山市教育委員会

※5 永井宏幸編 2001『志賀公園遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集) 愛知県埋蔵文化財センター

※6 赤塚次郎編 1994『松河戸遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

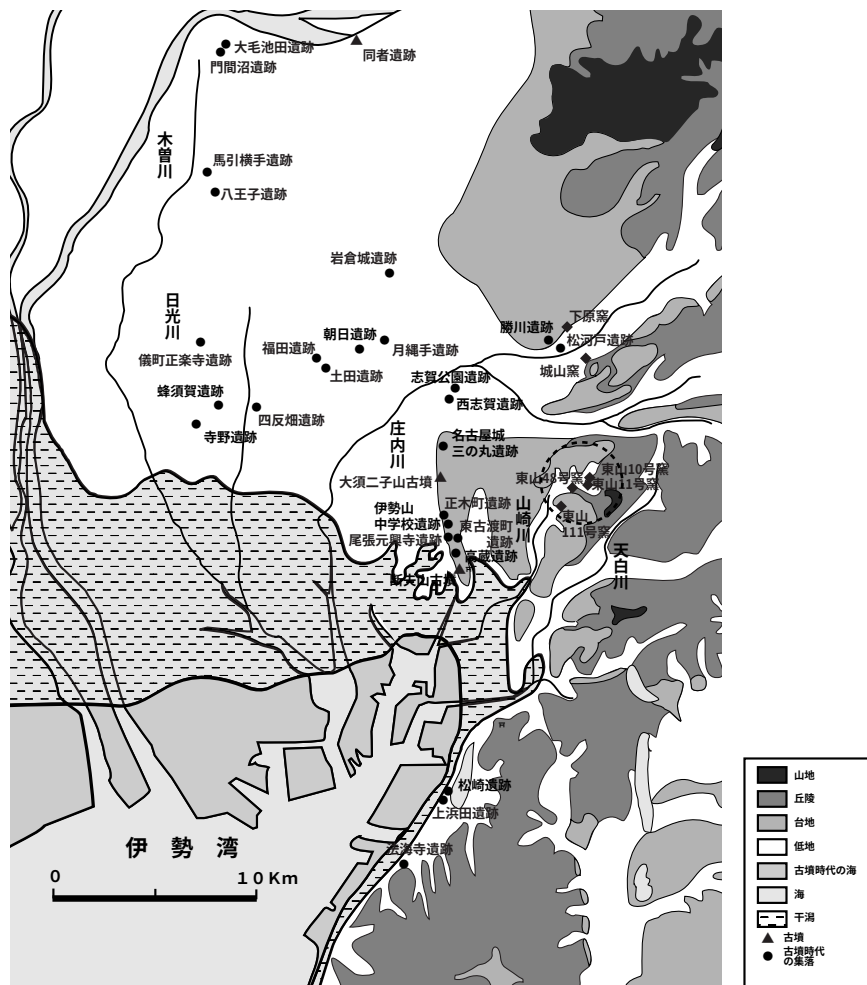


図1 遺跡の位置

※「尾張連とあゆみの海」『年報』平成10年度 1999（森勇一原案）を改変

式最古相に相当させた同者遺跡※¹などの間には明らかな形式的開きが存在することは、赤塚も当初から認識していた。また、宇田様式の内容を明示する資料はごく断片的なものにとどまり、様式を構成する器種についても明確でない。宇田式中、後期に至っては、具体的な資料提示すら欠いている。

これらの問題解決に少なからぬ貢献をするものとして、伊勢山中学校遺跡5次調査の初期須恵器をとともなう土器群が提示された※²。それを受けて村木誠は伊勢山中学校S K 108、S K 109を赤塚の「(仮称)宇田式」、

加納俊介の「宇田期」※³に相当させ、須恵器との時間的前後関係について整理した※⁴。赤塚も宇田様式の開始をS K 108（東山111号窯）に求め、宇田様式の開始について改変を加えた※⁵。しかし、これらは部分的な修繕と言わざるをえず、宇田様式の全体像は依然として霞んだまとなっている。

そこで以下においては、「松河戸様式の提唱」以後に蓄積をみた資料をもとに松河戸・宇田様式の再編を試みたい。検討材料としては、松河戸Ⅱ式は大毛池田遺跡※⁶、門間沼遺跡※⁷、松河戸Ⅱ式から宇田様式にか

※1 土本典生ほか 1991『同者遺跡発掘調査報告書』浅井古墳発掘調査会

※2 木村光一編『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』（名古屋市文化財調査報告31）名古屋市教育局委員会

※3 加納俊介 1991『東海』『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣

※4 村木誠 1996『土師器・須恵器—伊勢山中学校遺跡5次調査出土土器の検討—』『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』（名古屋市文化財調査報告31）名古屋市教育局委員会

※5 赤塚次郎 1998『東海』『中期古墳の展開と変革—5世紀における政治的・社会的変化の具体相（1）—』埋蔵文化財研究会第44回研究集会実行委員会

※6 武部真木編 1997『大毛池田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

※7 石黒立人編 1999『門間沼遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集）愛知県埋蔵文化財センター

けては志賀公園遺跡、宇田様式終末ないしその後続様式は儀町正楽寺遺跡^{※1}の資料を主に用意する。とくに初期須恵器がともなう良好な一括資料で構成される志賀公園遺跡の土器群が今回の検討の機軸となる。

2 志賀公園遺跡とその周辺

志賀公園遺跡は西志賀遺跡の北東に隣接する遺跡で、それぞれの調査史と遺跡の概観は永井宏幸らのレポート^{※2}に詳しい。遺跡は名古屋市北部、庄内川と矢田川の合流点付近の左岸、標高5m前後の低地帯に立地する。一方で、志賀公園遺跡を北に望む名古屋台地西縁には、伊勢山中学校遺跡、正木町遺跡、尾張元興寺遺跡、東古渡町遺跡などの新興集落が顕著に展開し、韓式系土器や初期須恵器が集中して分布する^{※3}（図1）。

志賀公園遺跡におけるここ最近の発掘調査は名古屋市教育局のほか、愛知県埋蔵文化財センターが平成8年度から平成10年度にかけて実施しており、センターが実施した調査の内容は刊行予定の調査報告書で詳述する。古墳時代の主要な遺構としては、自然堤防状微高地に相当する98 I区で、初期須恵器、石製模造品類が共伴する良好な土器集積（SU10～14）を各所で確認したほか、微高地南縁の自然流路を検出した96D区においても、流路の近辺で土器集積を検出している（SU01）。そのほか98 I区の南に位置する98 J区（微高地に相当）や98 K区（自然流路に相当）においても、まとまった量の土器群を得ている。

本来なら、土器が集積（廃棄あるいは遺棄）された一連の行為についての復原作業も要求されようが、詳細は本報告に譲り、出土状況の検証などからほぼ短期間の所産とみなした土器集積資料を中心にそれらの整理、把握を試みたい。

3 分類

志賀公園遺跡出土の土器群を基本的な材料として、土師器の分類を提示する。器種分類の依って立つ根拠は、形態的属性から推定した土器の機能的側面を第一義としたものの、器種を横断する機能が事実存在すること（各種の壺を煮沸に供することなど）には、少なからぬ注意を払っておくべきである。土器の使用痕の

観察などを通じた機能推定については別に検討する機会を用意したい。

さて、様式を構成する代表的な器種としては、甕（鍋）、壺、高杯、椀鉢類が存在する。なお土師器甑は、その数量などから、基本的な器種としての位置を占めていたかは疑問視される。器種分類提示の概要は図2、3に示した。

甕は口縁部の形状、脚台の有無と底部の形状、調整技法などを指標に甕A～Hに区分する。松河戸分類の甕A・甕B・甕C（台付甕）は基本的に踏襲し、甕D（台付甕）、甕E・甕F（丸底甕）、甕G（平底甕）・甕H（小型平底甕）を追加設定した。甑と鍋については、煩雑になることを避けるためここでは細分を行わない。

壺は小型壺を除いたものについて、松河戸分類を参考に壺A～Cを再設定した。基本的に壺A・Bは大型・中型品、壺Cは中型品である。小型壺は松河戸様式にもっとも流行した器種で、廻間Ⅲ式以降に広域に流布した小型丸底壺とは系譜やその意味を区別する必要があると思われる。

高杯は数量が豊富で、形態も多様、それらの系譜関係も想像以上に複雑であったと考えられる。大きくは、脚部を細長い柱状とする屈折脚高杯（高杯A）、脚部の調整に指頭によるナデを多用したもの（高杯B、C）、脚部の調整にヘラ工具を使用したもの（高杯D）の3系統を考える。とくに高杯Dは椀形高杯と称されてきたもので、胎土の特長、形態や法量、製作技法などの規格性がきわめて顕著である。鉢状の杯部をもつ高杯Hについては、脚部の形状が明らかでない。ここでは脚付鉢とした。

松河戸Ⅱ式以降に普及する大型の高杯は口径20cmを目安に高杯と分離、大型高杯A～Dとして設定した。大型高杯Aは垂下椀をとまうもので、基本的には系列変化が認められる。

椀鉢類は便宜的に鉢と椀に区分した。鉢は直口鉢と屈曲鉢があって、後者は体部が深いものと浅いものがある。椀は法量が規格的。

※1 池本正明編 1996『儀町正楽寺遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第68集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

※2 北村和宏・西原正佳・永井宏幸 1998「志賀公園遺跡と西志賀遺跡、調査の軌跡と再評価」『年報』平成9年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

※3 木村有作 1999「名古屋台地西縁の集落遺跡と東山窯」『考古学に学ぶ』（同志社大学考古学シリーズⅦ）同志社大学考古学シリーズ刊行会

主要器種分類

【甕】

A S字状口縁台付甕（S字甕）

口縁部内外面の屈曲を保持するS字甕の最末型式（S字甕D類新段階）。

B 宇田型台付甕（宇田型甕）

S字甕特有の口縁部の屈曲を失ったもので、S字甕の外面調整の手順を踏襲したもの。口縁部形態などをもとに1類～4類（B1～B4として対比）に分類、短頸小型のものをB5とする。

C く字状口縁台付甕（ナデ甕）

く字状に外反する口縁部をもつ台付甕で、内外面の調整はナデを原則とする。法量に大中小がある。口縁端部を丸くおさめるものが多い。

D く字状口縁台付甕（ハケ甕）

く字状に外反する口縁部をもつ台付甕で、外面にハケ調整を施すもの。外面調整をもとにDaとDbに分類。

Da 長い単斜方向のハケ調整を特長とする。口縁端部は平坦で、内外にわずかな肥厚が認められる。

Db 当たりがやや弱いハケ調整を特長とする。口縁端部はわずかなつまみあげ状となるものが多い。口縁部内面にヨコハケを施す。

E つまみ上げ状口縁（丸底）甕

口縁端部がつまみ上げ状となる長胴丸底甕。E1とE2に分類。

E1 全体に厚手で、外面のハケ調整がやや粗なもの。口縁端部の平坦面は幅広でシャープさを欠く。

E2 全体に薄手で、外面のハケ調整が密なもの。口縁端部の幅は狭く、シャープな断面三角形となる。

F 丸底甕

甕E以外の丸底の甕を一括。布留系甕や近江系甕など複数の系譜のものを包括する。

G 平底甕

外面は板ナデ、またはハケ調整。それぞれに法量の大小が存在する。

H 小型平底甕

頸部が明確にくびれない小型の甕。

【甑】

数量が少なく、形態に規格性が乏しい。体部の形態や底部の蒸気孔などによって分類可能。

【鍋】

広口丸底の器形で、把手が付されるもの。

【壺】

A 広口壺

口縁部が直線的に外反する大型の壺。煮沸に供された痕跡がみられるものも少なくない。CaとCbに分類。

Ca 内外面調整板ナデ、装飾がないもの。

Cb 宇田型甕の外面調整を装飾的に施したもの。

B 有段口縁壺

口縁部が有段状に外反するもの。体部外面にハケ調整を施す。口縁部の形態をもとにB1～B3に分類。

B1 口縁部上半が明確に上方へ立ち上がるもの。屈曲部に突帯を垂下させるものが多い。

B2 口縁部内面の段は消失し、屈曲部が外方へ鋭利に張り出すもの。口縁部先端を細く仕上げる。

B3 口縁部の屈曲が鈍く、器壁も全体に厚いもの。

C 直口壺

口縁部が外反する中型（口径、器高とも14～16cm）の壺。体部の形態などからC1～C3に分類。

C1 体部球形。口縁部が長いものと短いものがある。

C2 体部中位が大きく張る形態。

C3 体部上半がやや張りをもつ。扁平化した形態。

【小型壺】

A 体部球形で口縁部が直線的に外反するもの。A1とA2に分類。

A1 口径と体部径がほぼ等しい形態。

A2 体部径が口径をやや凌駕する形態。

B 底径を大きくとる安定した形態で、口縁部は短い。B1とB2に分類。

B1 口縁部が外反するもの。

B2 明確な頸部もたないもの。

C 口縁部は直線的に外反し、体部が曲線で構成されない形態のもの。

D 体部が扁平なもの。

E 口縁部が有段となるもの。

【高杯】

A 脚柱状部は細く、裾部が屈折するもの。杯部上半はやや外傾する。

B 杯部上半が外傾し、口径が17～19cm前後と大きいもの。脚柱状部が極端に膨らみ、裾部も大きく開く。

C 脚部が裾に向かって緩やかに開く形態で、口径が14～16cmのもの。杯部の形態からD1～D3に分類。

C1 杯部上半は外反、杯部下半との境界が明瞭なもの。

C2 杯部上半がやや彎曲するもの、または杯部下端から一気に外反するもの。杯部下半との境界が不明瞭。

C3 杯部全体が内彎するもの。

D 椀状の杯部をもつ高杯で、口縁端部は外方につまみ出される。脚部は緩やかに裾に向かって開き、脚端部は下方へ肥厚する。

E 口縁部が端部付近で外折するもの。F1～F2に分類。

E1 脚部高が杯部高を上回るもの。

E2 脚部高と杯部高がほぼ1：1のもの。

E3 杯部高が脚部高を上回るもの。

F 全体に厚手で、つくりがやや雑なもの

G 水平に開く低い脚部をもつもの。杯部は半球形で深く、口縁端部に2～3条の沈線をめぐらす。

H（脚付鉢） 深い鉢状の杯部をもつもの。口縁部は屈曲する。

【大型高杯】

A 口縁部が直線的に外反するもので、突帯を垂下させる。杯部の形態によってA1～A3に分類。

A1 杯部が浅く、杯底部内面がほぼ水平なもの。

A2 杯部が深く、杯部上半が直線的に外反するもの。

A3 杯部が深く、杯底部から一気に外反するもの。

B 杯部が深く、口縁端部が上方に立ち上がるもの。

C 椀形の杯部をもつもの。器壁は薄い。

D 杯部が深く、杯部上半が外傾するもの。

【鉢】

A 底部平底で口縁部が直線的なもの。

B 底部丸底で口縁部付近が外折するもの。

【椀】

A 底部丸底で口縁部付近が内彎気味のもの。

B 底部丸底で口縁端部が外方へつまみ出されるもの。

図2 器種分類図（1）

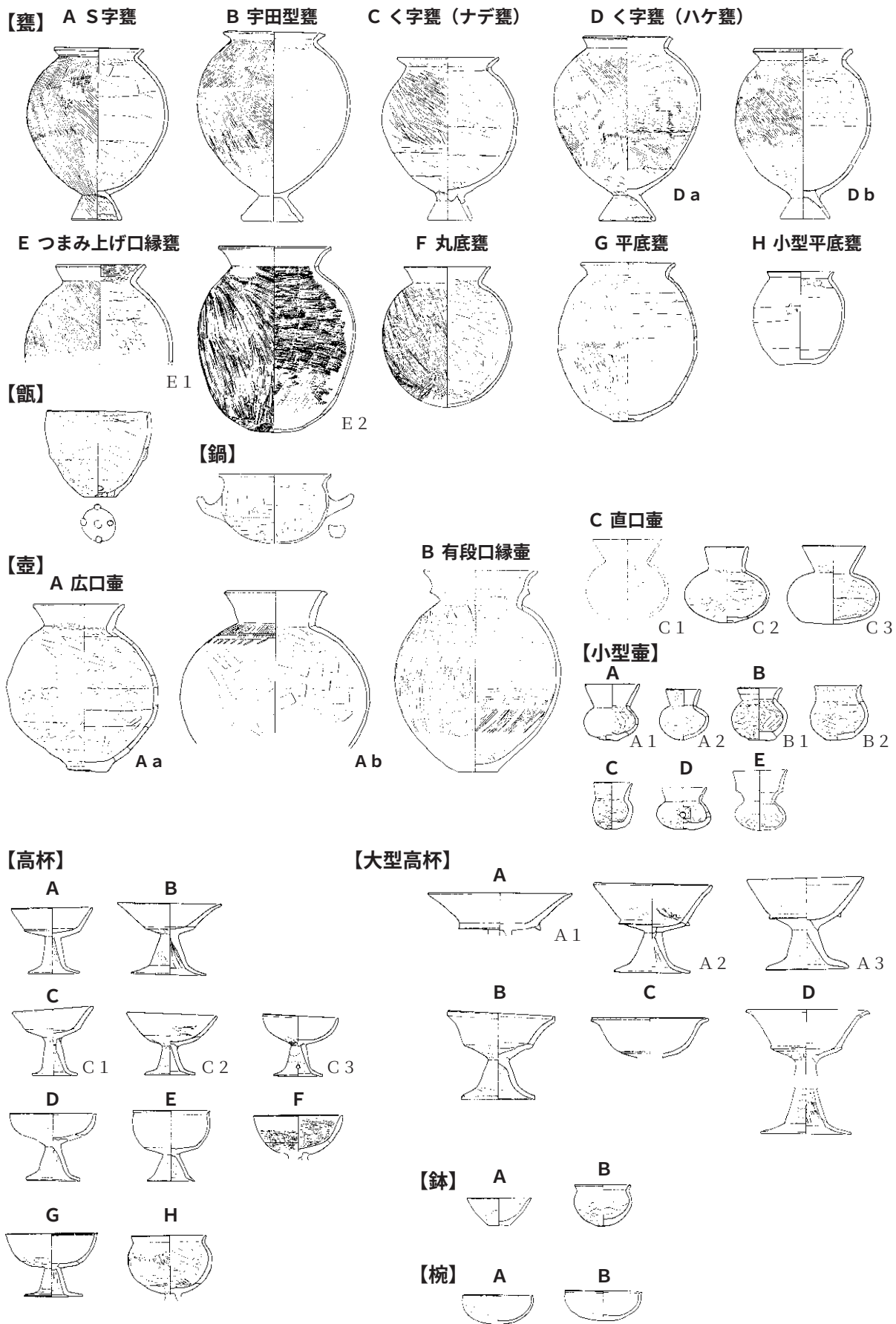


図3 器種分類図（2）

4 各期の設定

ここで志賀公園遺跡の土器群をもとに各期の設定を試みる。具体的には志賀公園遺跡の資料を1～4期の4期に区分し、それに後続する5、6期を設定する。志賀公園遺跡において5、6期に相当する資料がきわめて希薄な点が懸案となるものの、赤塚が提示する須恵器の各期設定による補強、検証によって、その問題は一定の解決をみるものと考えられる。

(1) 器種組成

各期の設定を行う上で、各期における器種組成は重要な要素となる。志賀公園遺跡では、98 I 区を中心として地点を転じながら土器群が目的的に集積されており、基本器種も概ね網羅しているものと考えられる。そこで、地点ごとの土器群の数量的把握を行い、それらの組成の異同をまずは明らかにしておきたい。

組成比の算出方法について簡単に触れる。甕は口縁部計測法から算出した個体数と、脚台・底部から識別した個体数のうち多い方を採用した。大型の壺(壺A・B)については口縁部計測法を用いたが、中型の直口壺(壺C)と小型壺は体部を用いて個体識別を行ったものを口縁部残存率に換算した。高杯と大型高杯は脚(柱状)部を用いた個体識別、鉢鉢類は底部を用いた個体識別から算出した個体数を同様にそれぞれ口縁部残存率に換算した(図4)。

図5から、志賀公園遺跡における土器群の組成は大きく3類型に分類できる。第一類型は、高杯と小型壺がそれぞれ4割前後組成し、壺がやや卓越する傾向を特長とするもので、SU01が相当する。第二類型は、

高杯が7～8割を占めるもので、SU13、SU10、SU14が含まれる。ただし、SU13においてのみ認められる小型壺の一定量(1割程度)の組成は、第一類型との相対的な近さを示していると考えられる。第三類型は、高杯が5～6割を占めるもので、SU12(A、B群)、SU12西群(西、北西群)、SU11がこれに含まれる。ただし、SU11には相当量の須恵器がともなうので、それらを含めた場合、土師器各器種の比率は相対的に減少することになる。

ここで確認した3類型が時間的な変移の傾向を示したものとみなすことが妥当であるかどうかは、特徴的な器種の細分基準を示したうえで判断し、各期の設定に援用することとする。

(2) 細分の基準

ここでは松河戸・宇田様式を細分する指標を得ることを目的として、特定器種の型式変化を明らかにする。その機軸とする器種として宇田型甕(S字甕)と高杯を取りあげる。前者は形態的特長から系列変化の把握が容易な器種で、後者はもっとも普遍的に安定して存在する器種である。

A. S字甕D類・宇田型甕の変遷

S字甕D類・宇田型甕の分類、変遷はすでに赤塚によって提示されたもの※1があることは周知のとおりで、それは概ね承認、追認されている。しかし、松河戸Ⅱ式2段階(宇田型甕1類が主体的にともなうとする)と宇田式最古相(宇田型甕2類がともなうとする)との間に型的開きが存在することが明らかである以上、宇田型甕1類から4類の内容についても再吟味が必要であろう。

そこで、宇田型甕との異同が常に取り沙汰されるS

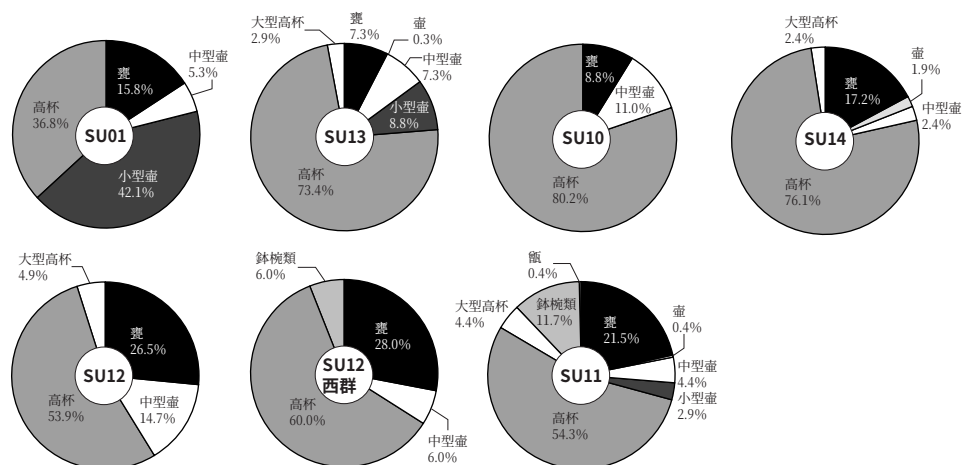


図4 器種組成グラフ

※1 赤塚次郎 1988『最後の台付甕』『古代』第86号 早稲田大学考古学会

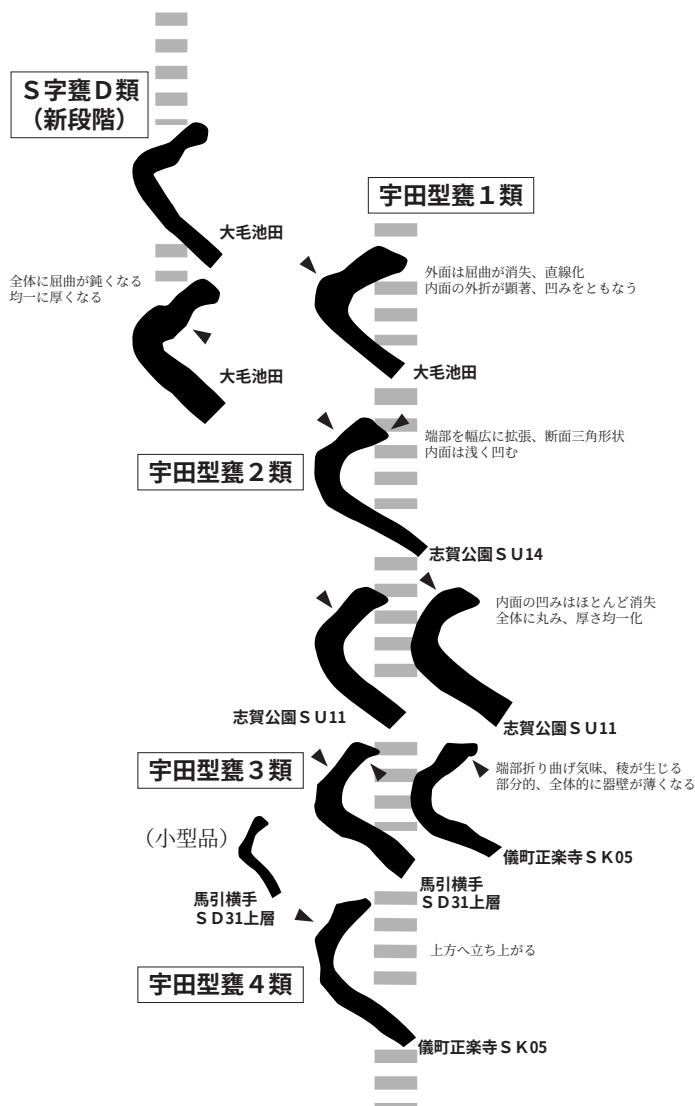


図5 S字甕・宇田型甕変遷概念図

字甕D類新段階をも含めて、宇田型甕の変遷を赤塚のそれと比較しつつ、改めて提示する（図5）。

S字甕D類新段階（甕A） 口縁部と体部の器壁が均一化し、器壁自体も厚手となる。口縁部の屈曲は残存するものの、その屈曲は鈍く、全体に鋭利さを欠く。S字甕C類に特徴的な頸部のへら工具を用いた沈線を痕跡として残すものが多い。体部最大径を中位におく。

宇田型甕1類（甕B1） 口縁部は外面の屈曲が消失し、直線的となる。また、S字甕D類に痕跡的にみられた頸部の沈線も消失する。一方、口縁部上半の内面は明瞭に凹み、外反も強い（上半と下半の区分が明瞭）。体部最大径は中位よりやや上にある。1類（古段階）の脚台部はS字甕の特長を留め、ハケ調整を残す脚高の高いもの。S字甕D類（新段階）と共伴する事例が多い。

宇田型甕2類（甕B2） 口縁部内面の凹みは曖昧になり、消失する傾向にある。口縁部上半の内面が浅く凹み、口縁端部の平坦面が断面三角形に拡張されたものを古段階、口縁部全体が凹凸を失い、緩やかに立ち上がったものを新段階とする。両者は混在することが多い。体部は2類古段階にもっとも球形に近くなるとみられる。脚台部はハケ調整を失い、大きく八の字状に開く形態に変化する。

宇田型甕3類（甕B3） 口縁端部の平坦面が明確化し、口縁部先端の外面に稜を生じるようになる（口縁端部が外方へ折り曲げ気味となる）。口縁部の付け根付近の器壁が薄くなるものが多いほか、口縁部から体部全体の器壁が薄いものもみられる。また、宇田型甕3類には短頸の小型品（甕B5）が新たにともなう。

宇田型甕4類（甕B4） 口縁部がさらに上方へ立ち上がるようになる。口縁部の屈曲が完全に形骸化した赤塚分類における宇田型甕4類は、濃尾平野で典型例を見出しにくい。ここでは宇田型甕3類に共伴する儀町正楽寺遺跡SK05を4類の古段階のものとしなした。

B. 高杯の組み合わせと法量の推移

高杯については、志賀公園遺跡の各遺構における形式の組み合わせを比較し、併せて法量の比較を行った。形式の組み合わせの比較には個体を識別した杯部の数量を用い、法量は杯部の口径と深さを計測した。

a. 組み合わせの推移

高杯Aは松河戸I式に通じる形式で、SU13にのみ残存する。高杯Bは杯部の外傾化、杯部稜径の増大の傾向など松河戸I式からの変化を受けるもので、SU01は高杯Bによって占められる。高杯Cは、高杯Bからの変化を与えられるもので、C1からC3への基本的な変化を考えることができる。高杯Dは少なくとも松河戸I式にはみられない新出の形式で、SU10、14、11、12A群に認められる。

それぞれの遺構で各型式が占める割合を示したものが図6で、高杯BからCへの変化をもってSU01からSU13への推移が、高杯Aの残存、高杯C1の比率、高杯Dの存否を拠り所としてSU13はSU10、14、11、12A群に先行することが確認される。また、高杯C1、C2、C3の組成からSU10、SU14からSU11、12A群への変遷を考えておく。

	A	B	C1	C2	C3	D
SU01						
SU13						
SU10						
SU14						
SU11						
SU12A群						

40%以上 31~40% 11~30% 1~10% 0%

図6 高杯の組み合わせの推移

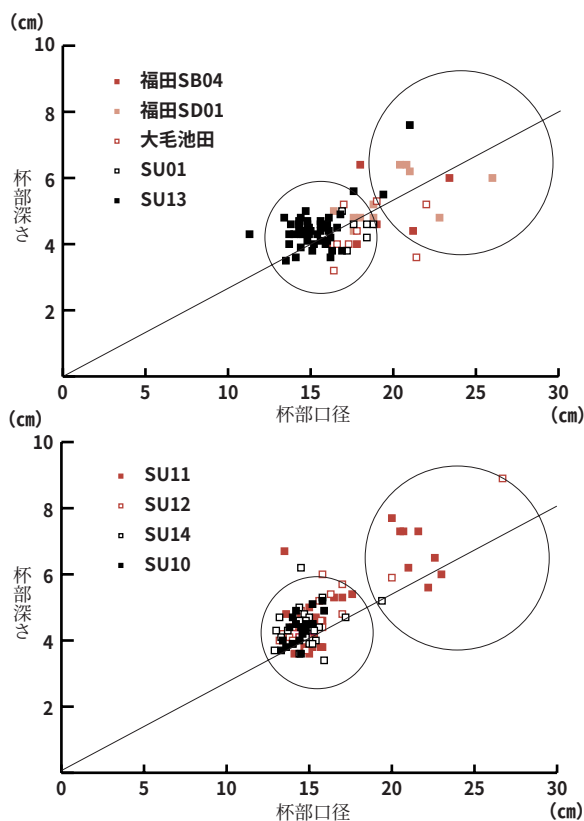


図7 高杯の法量分布(上:1・下:2)

b. 法量の比較

高杯の組み合わせの変化にともなう法量の変化を確認しておきたい。図7-1ではSU13、SU01、福田遺跡(SD01、SB04)^{*1}、大毛池田遺跡(95A b区包含層)を、図7-2ではSU13、SU10、SU14、SU11、SU12(西群を含む)を比較した。

図7-1ではSU13とSU01、福田遺跡SD01・SB04、大毛池田遺跡が口径17cm前後を境界に法量が二分されることが分かる。また、前者の法量は規格化であるのに対して、後者の法量は散漫に分布する傾向にある。加えて図7-2ではSU13の法量にSU10、14、11、12の法量が重複することから、SU13の規格性がほぼ踏襲されていることが分かる。また、大型高杯の法量分化については、SU01、SU13が不明瞭なのとは対照的に、SU11で大型高杯は明確に法量分化している。

宇田型甕、高杯の変移から、SU01、SU13、SU10・14、SU12・SU11の順で土器群の序列が決定された。と同時に器種組成も第一類型、第二類型、第三タイプの順序、単純化すれば、小型壺の卓越、小型壺の激減と高杯の増加、高杯の相対的減少という推移をたどったことが確かめられる。これらをもとに次に各期の設定を

行う。

(3) 志賀公園1期～4期、5・6期の設定

SU01を1期、SU13を2期、SU10・14を3期、SU12・11を4期として各期の具体的内容について略述する。ここでは各型式群の変化を確認すると同時に、型式群を横断する志向性にも注意したい。

志賀公園1期 志賀公園遺跡SU01のほか、大毛池田遺跡95A b区包含層、門間沼遺跡95E b区、福田遺跡SD01・SB04が同様の内容を示す。

甕は甕A・Bと甕Cによる構成で、有段口縁をもつ近江系の丸底甕も散見される。甕A・Bでは、甕A(S字甕D類新段階)が主体となるも、甕B1(宇田型甕1類)が出現する。高杯は高杯Bが主体で、杯・稜部径の増大、脚部の肥満化はもっとも顕著となる。1期から見出される大型高杯は、形態が変化に富む。大型高杯A1がもっとも普遍的であるが、高杯Bとの法量分化は明確でない。1期にもっとも多く組成する小型壺は、丸底が形骸化、底部付近が重厚になり、安定化を志向するものが多くなる。中型の直口壺(壺C)は体部球形の壺C1が存在する。高杯や小型壺など小型器種を中心に、指による整形を表面化させたものが目立つ。

志賀公園2期 志賀公園遺跡SU13のほか同様の内容を示す土器群は、伊勢山中学校遺跡7次SB14^{*2}、5次SB16、5次SK120、正木町遺跡竪穴住居^{*3}がある。

甕は甕A、B、Cによる基本的な構成に変化はみられないものの、宇田型甕1類がS字甕D類に卓越するようになる。甕の各形式間には、肩部が張らず、体部最大径を中位におくという共通の志向性が看取される。

小型壺は激減し、代わって高杯の比率が激増する。高杯は高杯A、Bがごくまれに残存しながらも、法量が縮小、規格化された高杯Cが主体を占めるようになる。高杯Cは杯部が直線的な高杯C1が多い。直口壺は壺C1のほか、体部が算盤玉状に張った壺C2が新たに出現し、安定して組成するようになる。1期にみられた指頭によるナデを多用する傾向に変化はみられない。

志賀公園3期 志賀公園遺跡SU10、14を充てる。同様の内容をもつ土器群は伊勢山中学校遺跡5次SK14のほか、朝日遺跡新資料館地点^{*4}からも出土している。

高杯は2期と同様に高い比率で組成する。しかし、その構成は大きく変化し、高杯B、Cとは製作技法をまったく異にする斉一性の強い高杯Dが主体となる。高杯Dの形態の比較から、SU10がSU14に先行するこ

*1 日野幸治ほか 1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』愛知県名古屋農地開発事務所・土田関連遺跡発掘調査団

*2 服部哲也 1998『伊勢山中学校遺跡-第7次発掘調査の概要-』名古屋市教育委員会

*3 伊藤慎樹・小林義孝 1991『尾張正木町遺跡出土の初期須恵器』『韓式系土器研究III』韓式系土器研究会

*4 宮腰健司編 2000『朝日遺跡VI-新資料館地点の調査-』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集) 愛知県埋蔵文化財センター

とも考えられるが、3期を細分する絶対的な根拠とするには至らない。

甕の構成にも大きな変化が認められる。つまり、松河戸様式を通じて変化しなかった甕A・Bと甕Cによる構成に加えて甕Dが新たに参入する。SU14では平底（底部は未詳）の甕Gも加わる。S字甕は完全に消滅、宇田型甕は完全にS字甕からの脱却をはかる（宇田型甕の定型化）。宇田型甕は、口縁部が断面三角形に肥厚した宇田型甕2類（古段階）が主体。また、平底の甕Gを除いて、甕の体部の球形化志向が顕著となる。

小型壺はさらに激減、SU10、14では1点も識別されない。直口壺は肩が張った形態（壺C3）に変化する。

志賀公園4期 志賀公園遺跡SU12A群、SU12B群、SU12西群、SU12北西群、SU11が相当し、伊勢山中学校遺跡5次SK108・SK109、一宮市八王子遺跡95Ba区NR01-3層^{*1}が同様の内容をもつ土器群である。

多様な甕による構成はさらに顕著となり、つまみ上げ状口縁の甕E（丸底の可能性が高い）が確認されるようになる。なお、SU12では布留系甕も確認される。宇田型甕は2類（新段階）が中心となり、甕Dは口縁端部を平坦に仕上げるものが目立ち、端部に沈線を施すものもみられる。小型平底甕（甕H）は頸部がほとんど括れない広口のもの明確に定着する。甕は体部最大径位置が中位より上に上昇し、やや長胴化を志向するようになる。甕Cでは極端に肩の張りが強いものがみられるようになる。

高杯はその比率を減じる傾向にある。高杯G、大型高杯Cが参入、ほかにも粗悪な胎土で、法量の規格を脱した高杯Fもみうけられ、多様化の傾向がうかがわれる。組み合わせのうえでは、杯部全体が内彎する形態（高杯C3）と高杯Dがやや突出する。また、SU11では大型高杯は比較的目的立つ存在で、少なくともこの段階までに明確に法量分化したとみられる。小型壺は、小型壺C、D（須恵器甕を模倣）を中心として数を減じながらも組成する。中型壺はさらに扁平化したものがみられるようになる。

また、特徴的な器種として椀A、Bが出現する。両者とも薄手で、法量に強い規格性が認められる。椀A、Bが組成するのはSU11のみであることから、SU11は4期でも新相に位置づけられる可能性がある。

志賀公園5・6期 志賀公園遺跡においては4期

に後続する遺構群はほとんど見出しえず、96A区SD06（自然流路）でややまとまった土器群が確認される程度にすぎない。ここでは、通時的な理解をたすけるため、あくまで便宜上のものとして志賀公園5・6期を設定する。幸い5期に相当する資料は一定程度の蓄積があり、同者遺跡包含層、東海市上浜田遺跡調査区2遺物集中部^{*2}、尾西市馬引横手遺跡SD31上層^{*3}、名古屋市東古渡町遺跡1次SD03^{*4}、勝川遺跡62F区NR01（SX02）^{*5}、儀町正楽寺遺跡SK05をもって設定される。また、前四者が5期古段階、後二者が5期新段階の内容を示すものとみて大過なからう。

甕の構成の主たる存在は宇田型甕とみられ、古段階は宇田型甕3類が主体、新段階は宇田型甕3類と4類が混在する。高杯は、古段階から新段階にかけて減少・消滅する傾向にある。小型壺も高杯と同じく消滅に向かう。椀は椀Bを中心に一定量組成するが、4期と比較して器壁が厚化し、調整も雑になる。

6期は、土師器と須恵器によって構成される資料はきわめて少なく、いまだ不明瞭なものの、儀町正楽寺遺跡SK11、清洲町土田遺跡SZ11^{*6}、岩倉市岩倉城遺跡SZ1303^{*7}をもって設定する。6期には、5期までにみられた多くの器種が消滅、交替する。

甕は宇田型甕を含めた台付甕がほぼ消滅し、長胴丸底を特長とする甕E2に交替、甕E2と小型平底甕（甕G）による構成になる。甕E2は体部径が口径を大きく凌駕する形態。また、甕のほか、把手付鍋もみられるようになる（土田遺跡SZ01）。大型の甕も組成する可能性が高いが、現時点では良好な資料を欠く。高杯、壺、小型壺などは原則的には消滅。

（4）須恵器との共伴関係

ここで、志賀公園1～4期における須恵器の共伴関係を確認しておきたい（図8・9）。「東山古窯」を中心とした生産地編年と濃尾平野における消費遺跡との対応は別項を立てたので、ここでは、志賀公園遺跡における知見を簡単に整理する。

1期で須恵器は確認されず、土師器のみで構成される。2期（SU13）では、縄蓆文叩きを体部外面に施した甕1点（図8）のみ共伴する。3期では、SU10において無蓋高杯1点（図9-2）、SU14において無蓋高杯の脚部1点（図9-1）の共伴が確認された。4期では、SU12西群においていわゆる「羽釜形」の杯にともなうであろう蓋1点（図9-5）が、SU11

*1 樋上昇ほか1996『八王子遺跡』『年報』平成7年度（財）愛知県埋蔵文化財センター

*2 立松彰・永井伸明1999『上浜田遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

*3 伊藤太佳彦編1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第84集 愛知県埋蔵文化財センター

*4 木村有作1989『東古渡町遺跡第一次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

*5 樋上昇編1992『勝川遺跡IV』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

*6 赤塚次郎編1987『土田遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

*7 松原隆治編1992『岩倉城遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター

においては蓋杯、高杯、甕、把手付碗、器台、甕、鉢、甗の各器種計50点以上(図9-6~19)が共伴した。

生産地、すなわち志賀公園遺跡で出土した大半の須恵器の供給源としてほぼ断じてよい東山古窯との編年対比は、生産地の資料が断片的な情報で構成されている、あるいは欠如している以上、編年対比は相応のもので満足せざるをえない。現状では、陶邑窯を中心とした有力生産地^{※1}との対比、赤塚(本稿)、岩崎直也^{※2}がおこなう消費地の資料をも包括した様式的な編年をも援用し、全体を整合的に構成する必要がある。

各器種が出揃うSU11(4期)に共伴する須恵器は、いわゆる「羽釜形」の杯(図9-6・7)を含みつつも、総体として東山111号窯、あるいは伊勢山中学校遺跡5次SK108、109に対比せられる。消極的ながら4期でも内容的に古相を示すとしたSU12に共伴する須恵器は、SU11に共伴する須恵器に先行することは断じられないけれども、根本的な矛盾も生じない。またSU11では、陶邑窯産の可能性が高い口縁部破片1点が出土している(図9-19)。図9-19は口縁端部を上下にわずかに肥厚させつつ面となし、その下方に太く突出する突帯をめぐらす特長をもつもので、TK216号窯の甕(図9-20・21)に共通する要素が認められる。

4期に先行する3期を検討する。SU14で識別した無蓋高杯脚部は、菱形の透しを3方向に穿つもので、東山窯においては確認しえない。類例を求めれば、大

庭寺遺跡TG232号窯^{※3}(図9-3・4)などにそれを見出すことが可能である。ただし、SU14の高杯は、脚部の突帯を痕跡として残す程度であることから、大庭寺遺跡例に後出する可能性がある。さらに、この脚部の小破片がSU11の下層で出土していることはSU14(3期)がSU11(4期)に先行することを補強する重要な知見となる。SU10で共伴した無蓋高杯は、杯部の波状文1条の幅が太く鋭利さを欠く点、突帯も鋭利に突出しない点から、絶対的ではないが、SU11で共伴する無蓋高杯に型式的に先行する可能性がある。

2期に確認される縄蓆文叩きを体部外面に施した甕は、ON231号窯・TK73号窯で縄蓆文は見出されていないことから、それに先行する大庭寺遺跡に併行する可能性が高い。縄蓆文叩きはTK85、87号窯においても認められる点から、その有無が大庭寺遺跡併行であることを示す絶対的な指標となりえないことは植野浩三が指摘するとおりではあるものの^{※4}、大庭寺遺跡以外ではそれが客体化することに誤りはなく、土師器の型式も2期が大庭寺遺跡に併行することを支持している。

以上を単純化して述べれば、1期—須恵器生産開始期直前、2期—大庭寺遺跡、3期—TK73号窯型式、4期—TK216号窯型式(東山111号窯)という関係が確認されよう。



写真1 甕(図8)体部外面の縄蓆文の叩き

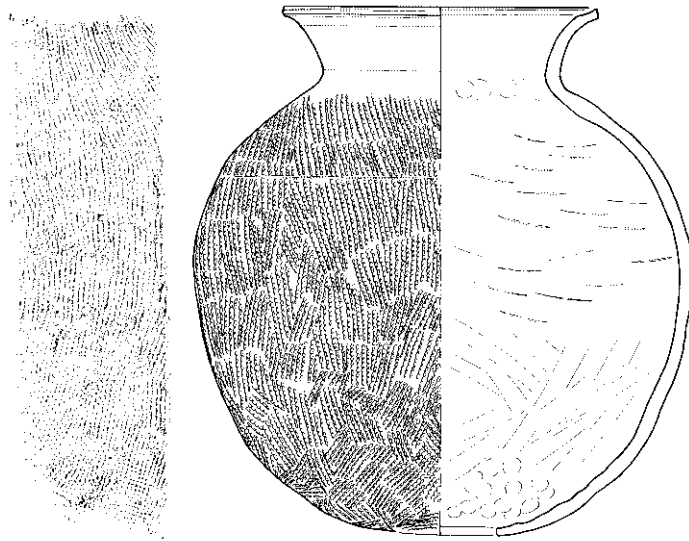


図8 志賀公園遺跡出土須恵器(2期 S=1/4)

※1 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

※2 岩崎直也 1987『尾張型須恵器の提唱』『信濃』第39巻第4号 信濃史学会

※3 岡戸哲紀編 1995『陶邑・大庭寺遺跡IV』(財)大阪府文化財協会調査報告書第90輯 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会

※4 植野浩三 1995『最古の須恵器型式設定の手続き』『文化財学報』第13集 奈良大学文学部文化財学科

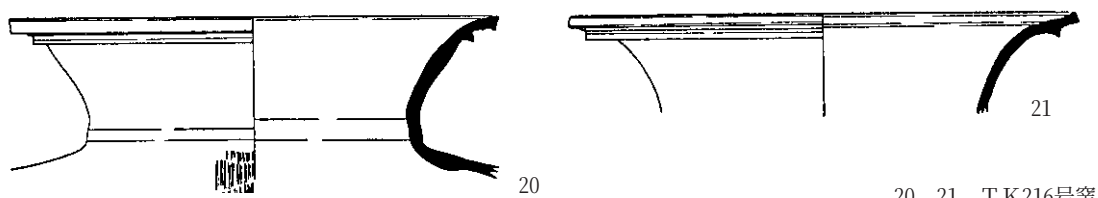
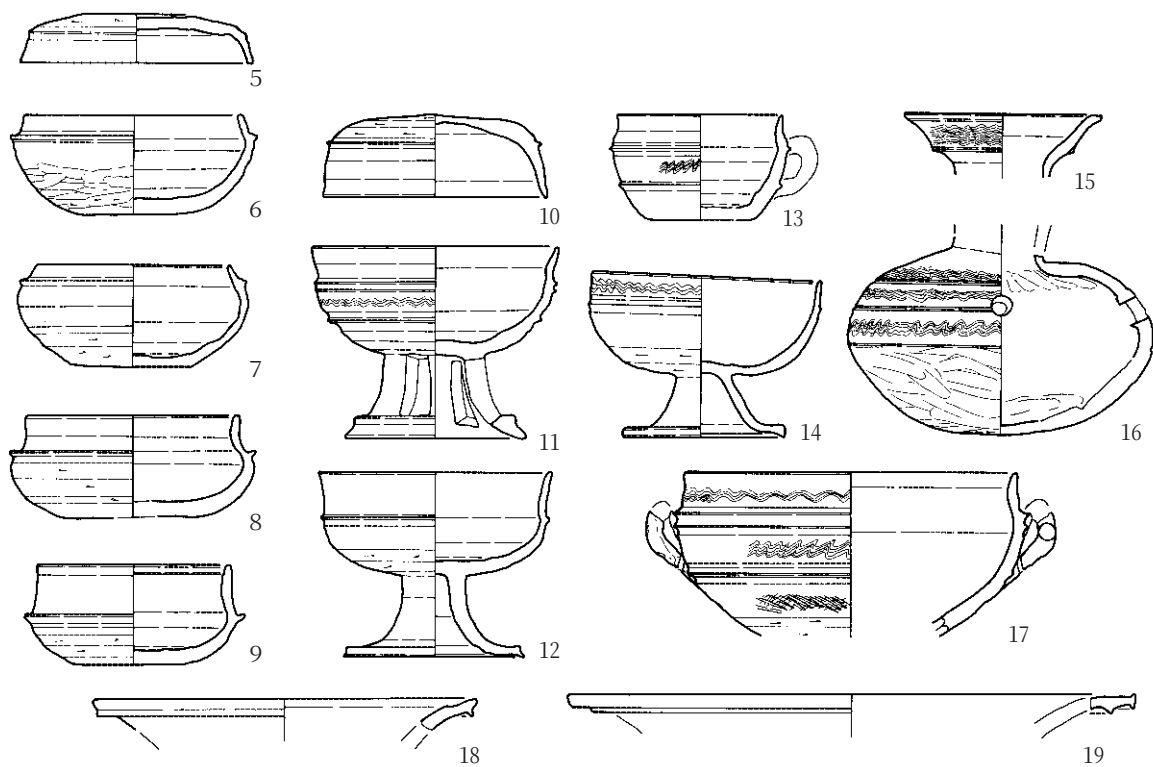
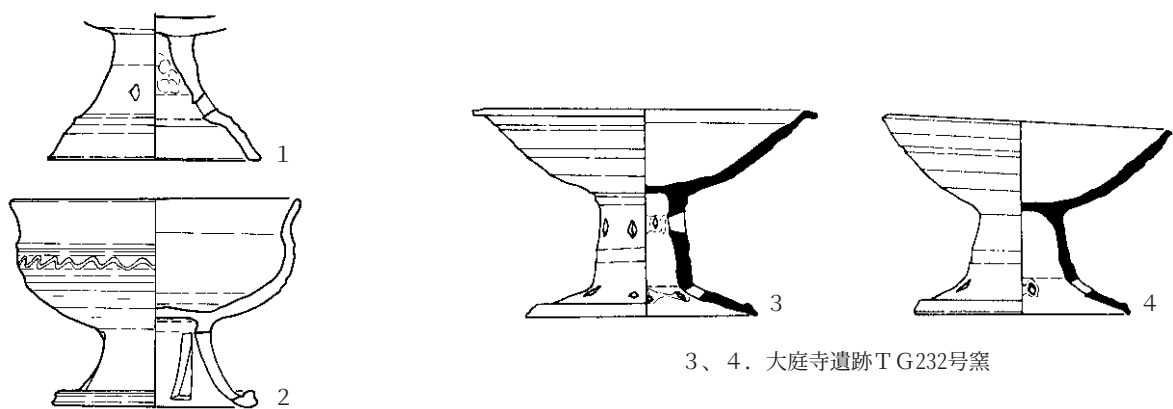


図9 志賀公園遺跡出土須恵器（3・4期）とその比較資料 S=1/4

5 松河戸・宇田様式の再編

(1) 画期の把握

これまでに志賀公園1～6期の設定をおこない、土器群の時系列上の並びを明らかにした。土器群の動態が何がしかの社会変化の要請に応えたものであるという立場に立つなら、その変化の過程、実相を見究めるうえで、画期の把握は不可欠である。ここでは2期と3期の間、5期と6期の間に大きな画期をおくことを主張する。

前者の画期は、新形式の出現によって土器群が大きく交替することを重視したものである。甕は新たな形式の甕（甕D、E、F、G）の出現によって、2期まで単純であった甕の構成が大きく変化し、一気に多様化する。形式ごとの甕の組成変化を示した図10によれば、2期と3・4期の差異は自明であろう。甕と同様、主たる器種の高杯についても、器種全体に占める比率を変化させないまでも、きわめて斉一性の強い高杯Dの出現によって、その組み合わせは全く異質のものとなる。

このとき注目したいのが、甕の重鋳物胎土分析結果である^{※1}。比較資料は少ないが、その結果は形式の多様化に呼応して、胎土もまた多様化する傾向がうかがわれるというものである。多様な甕の産地同定はさておくとしても、甕が製作される環境に何らかの変化があったことを想像することは不可能ではない。

一方で、高杯の相対的な増加と規格化に象徴される1期から2期への変化もまた、何らかの大きな変化を予想させるものであった。むしろこちらの変化を評価するむきもあってしかるべきであろう。しかし、廻間

Ⅲ式後半における高杯の減少傾向に相反するように、松河戸様式において屈折脚高杯が基本器種としてその位置を確たるものにする流れを見通せば、2期における高杯の変化は先行からの帰結として把握すべきであろう。

後者の画期は、煮炊以外の機能を担った土師器の器種がほとんど淘汰され、原則的に土師器は長胴の甕（甕、鍋と小型の平底甕がこれに加わる）に限定されることを重視したものである。消滅した土師器の器種の機能（貯蔵、供膳）は須恵器が継承し、土師器と須恵器の機能分化が確立する。

(2) 松河戸・宇田様式の再編

画期の把握を受け、様式の再編、再提示をおこなう。それは1、2期を松河戸様式（松河戸Ⅱ式）、3～5期を宇田様式として組み込み、6期は別様式名を冠することが適当であるとするものである。

松河戸Ⅱ式は1期をその前半期（松河戸Ⅱ式1段階）、2期をその後半期とする（松河戸Ⅱ式2段階）。ここでいう松河戸Ⅱ式前半期は、「松河戸様式の提唱」でいうところの松河戸Ⅱ式1・2段階を含み込んだものであるが、「提唱」における松河戸Ⅱ式1段階に相当する資料が不分明である以上、その細分は一旦括弧に入れておくべきであろう。

宇田様式については、その開始を3期に求め、須恵器の「定型化」にかかる土師器の器種組成の変化（高杯の相対的な減少など）を前提として、3～5期を3、4期と5期に二大別する。5期はさらに古・新の段階に細分できるであろう。また、宇田様式は前・中・後期に区分する見通しがもたれていたが、志賀公園遺跡の資料によって松河戸様式と宇田様式の間の型式的空白が埋められたものとして、宇田前期・中期を宇田Ⅰ

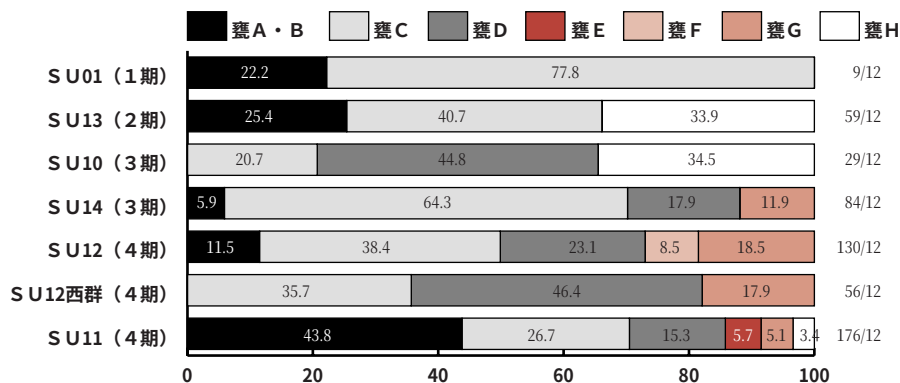


図10 甕の組成の推移

※1 志賀公園遺跡報告書の自然科学分析結果を参照。

式・Ⅱ式に改変する。すなわち、3、4期を宇田Ⅰ式に相当させ、3期を宇田Ⅰ式Ⅰ段階、4期を宇田Ⅰ式Ⅱ段階とする。そして、5期を宇田Ⅱ式に充て、2段階に細分する（Ⅱ式Ⅰ段階・Ⅱ式Ⅱ段階）。

さて、従来の理解で宇田式後期とされた6期については、その様式内容は前段とは明らかに異なることから、宇田様式を様式名として充ててことを撤回し、新たな様式名を冠したい。6期に存在する濃尾平野の集落遺跡はほとんど未見である現状では、様式の命名には慎重を期すべきであろうが、尾張平野の西部に位置する儀町正楽寺遺跡を標識として「儀町式」とすることを提唱する。これは単に目新しさを求めたものではなく、儀町正楽寺遺跡を含めた三宅川流域が、律令期に尾張国の中心として躍進する前史を積極的に評価したものである。

6 尾張型須恵器の編年と土器編年

東海地域の須恵器編年は、斎藤孝正による「猿投窯」研究の精力的な論考^{*1}によって支えられてきた。そしてその成果は一定の評価を得ているものと思われる。つまり東山111号窯・東山48号窯・城山2号窯・東山11号窯・東山61号窯への変遷である。（以下、時期的な範囲を6世紀前葉までとする。）城山2号窯という猿投窯ではない資料を使用しているが、おおむね東海地域の開闢須恵器窯としての「東山窯」を機軸とした生産地の編年が基本であった。

一方で、1987年に岩崎直也による「尾張型須恵器の提唱」と題する論考が発表された^{*2}。消費地を中心とする編年観であり、さらに尾張型須恵器という視点が新鮮であった。この内容は、実は1982年の「愛知考古学談話会」第1回例会の会場で拝聴していた。しかしながらこの重要な論考が発表されてから今日にいたるも、「尾張型須恵器」の消費地編年はほとんど引用されていない。さらに「尾張型須恵器」という用語も積極的に批判の対象になってはいないのは残念である。その理由は不明であるが、こうした須恵器研究の現状を踏まえて、ここではあらためて岩崎が提唱した尾張型須恵器に基づく編年と、ここで提示した5世紀の土器編年との関係を整理しておきたい。

まず複雑化を避けるため、尾張型有蓋高杯を中心にした変遷を見通し、その型式組列を機軸にした「尾張型須恵器」をⅠ～Ⅲ期に大きく区分する。その指標は、Ⅰ期を中心とした蓋杯の羽釜風形態の消長、口径の変化、有蓋高杯では、主に脚部の柱状化（Ⅰ期）から八

字状へ拡張（Ⅱ期）にある。また長脚化に加えて三角透孔をもつ有蓋高杯の登場（Ⅲ期）など。こうした明瞭な器種の消長から、比較的容易にⅢ期に区分が可能であると思われる。なおⅠ期を3段階にⅡ期を4段階に区分し、Ⅲ期は便宜的に2段階に区分しておきたい。結果的には岩崎編年のⅠ期3・4段階と5・6段階を3時期区分に変更する形になる。

次に猿投窯における斎藤編年との対応関係であるが、まず東山111号窯がおおむね尾張型須恵器Ⅰ期Ⅱ段階を、東山48号窯が尾張型須恵器Ⅰ期Ⅲ段階を中心とした時期に操業されたものと考え、猿投窯ではないが城山2号窯を尾張型須恵器Ⅱ期Ⅰ段階に併行させておく。また東山11号窯の操業が、おおむねⅡ期Ⅱ段階に併行するものと思われるが、問題はその後東山窯での標識窯が設定されていない点である。東山61号窯はⅢ期Ⅱ段階を中心とすることは明らかであり、すると従来の生産遺跡による編年観では、東山11号窯と東山61号窯の間に大きな時期差が生じることになる。実は、この間を埋める尾張最大の生産窯こそ、春日井市下原窯の操業であると考えている。5世紀後半の当地域を代表する尾張型須恵器・尾張型埴輪の生産遺跡こそ、下原窯といっても過言ではない。

さて、次に陶邑編年との併行関係であるが、この点はすでに多くの論考が用意されている。特に注目したいのは、植野浩三の須恵器生産の展開における研究成果^{*3}である。植野は地方窯の展開を視座に入れて、東山111号窯・48号窯をおおむねON46型式との併行を想定し、城山2号窯をTK208型式とする。また東山61号窯はTK10型式新段階に併行すると考えることができ、こうした併行関係は、岩崎論文においてもすでに指摘されている。したがって、新しく再編成した尾張型須恵器Ⅰ期はTG232型式に溯る可能性を残しつつ、おおむねTK73・216型式からON46型式までとし、Ⅱ期をTK208・23・47型式、そしてMT15型式までと考える。そしてⅢ期はTK10型式を中心とした併行関係をまずは想定しておきたい。絶対年代としては、MT15型式の中で西暦500年を迎えるという白石太一郎の考え^{*4}に賛同し、年輪年代によるTK73型式が西暦410年代に想定される点^{*5}を配慮すれば、おおむねⅠ期を5世紀第2四半期を中心とする時期と考えておくことができよう。したがってⅢ期を6世紀前葉の時期とする。

最後に濃尾平野の土器編年との関係であるが、宇田Ⅱ式がおおむね尾張型須恵器Ⅱ期と大きく重複する点は容易に推察できる。宇田型甕3類の資料が、ここで

*1 斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXX XVI（史学29） 名古屋大学文学部

*2 岩崎直也 1987「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第39巻第4号 信濃史学会

*3 植野浩三 1988「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集 奈良大学文学部文化財学科など

*4 白石太一郎 1985「年代決定論（二）—弥生時代以降の年代決定」『岩波講座日本考古学 1 研究の方法』岩波書店

*5 光谷巧実・次山淳 1999「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」『奈良国立文化財研究所年報』1999-Ⅰ 奈良国立文化財研究所

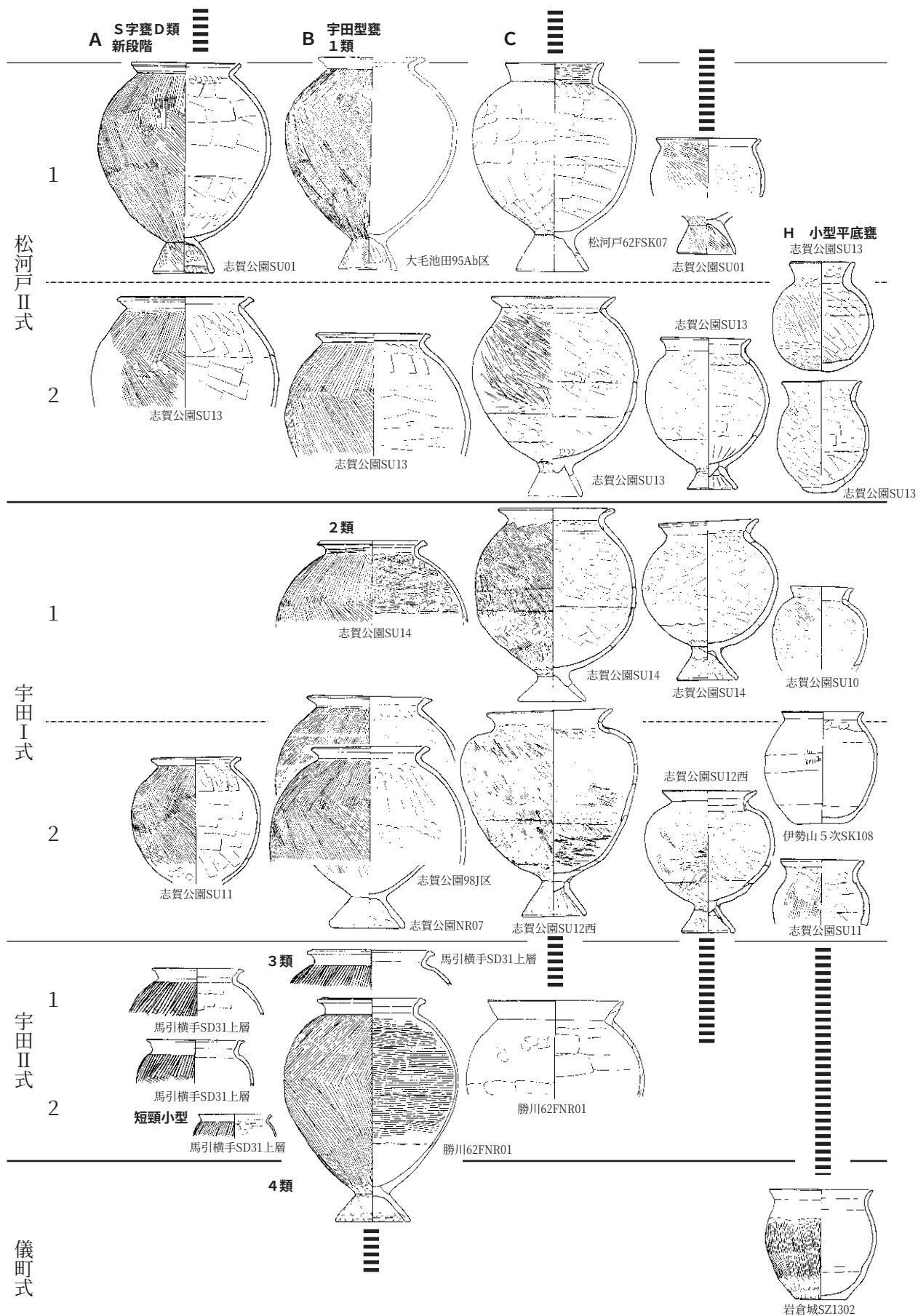


図11 編年表(1) S=1/8

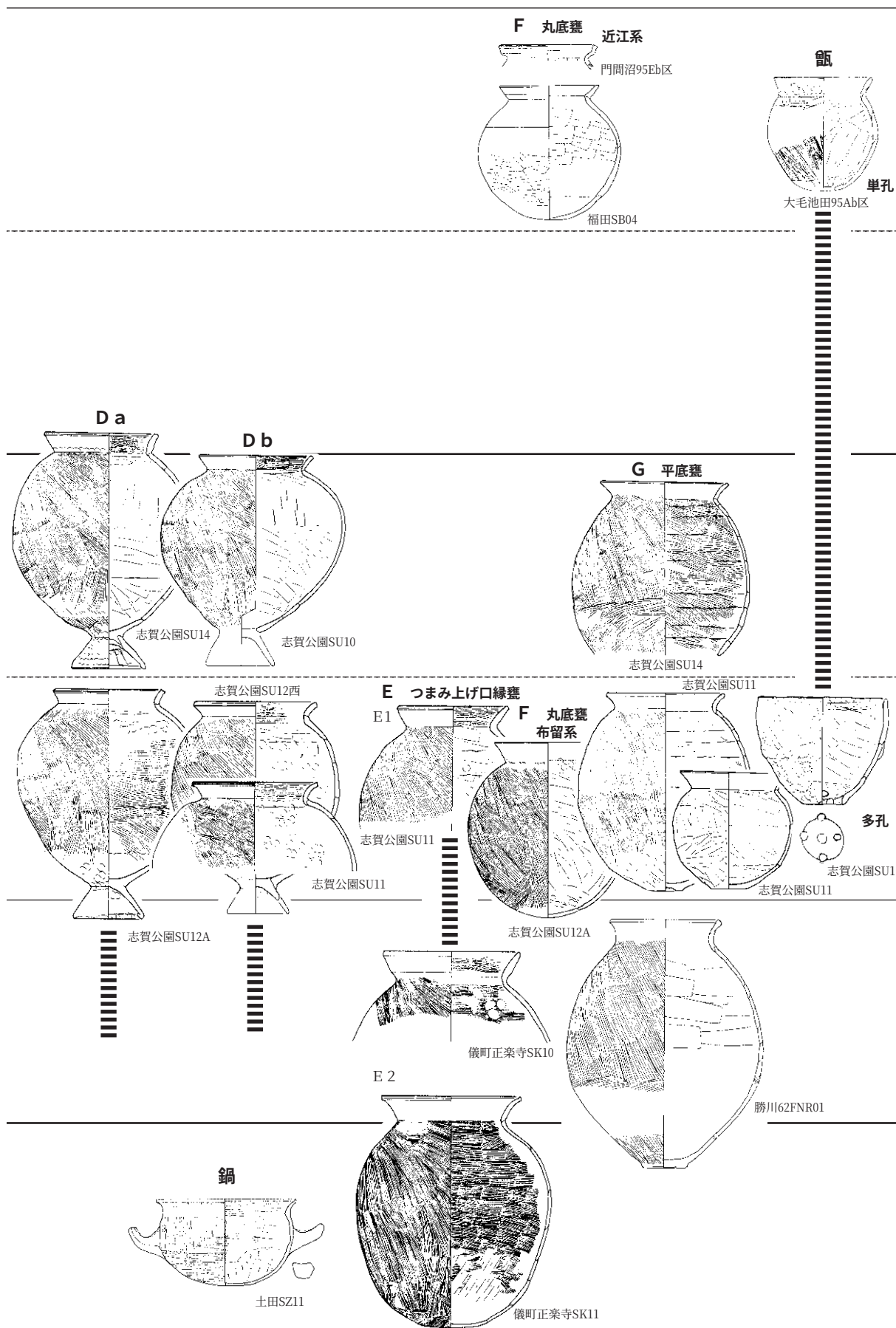


図12 編年表(2) S=1/8

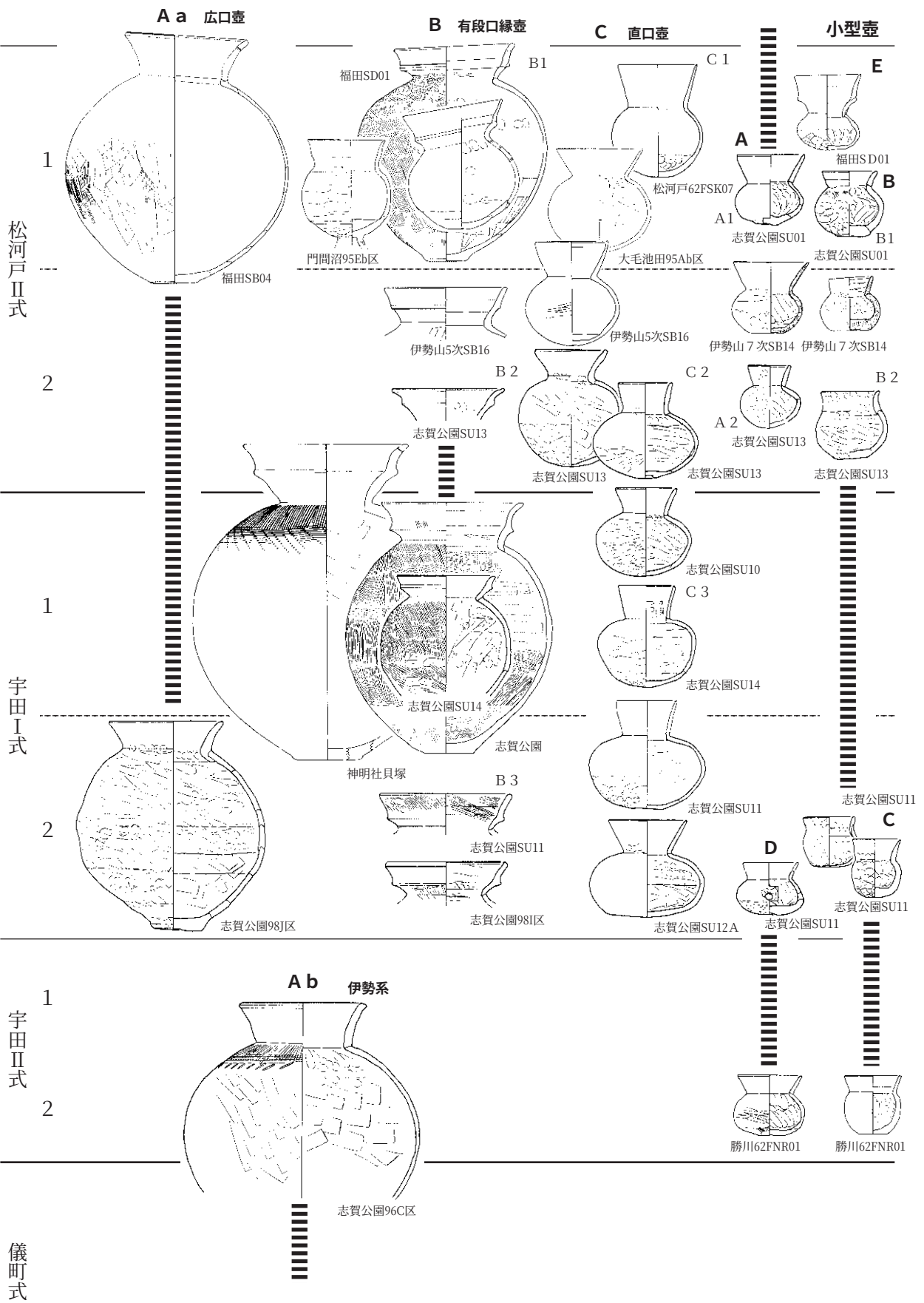


図 13 編年表 (3) $S=1/8$

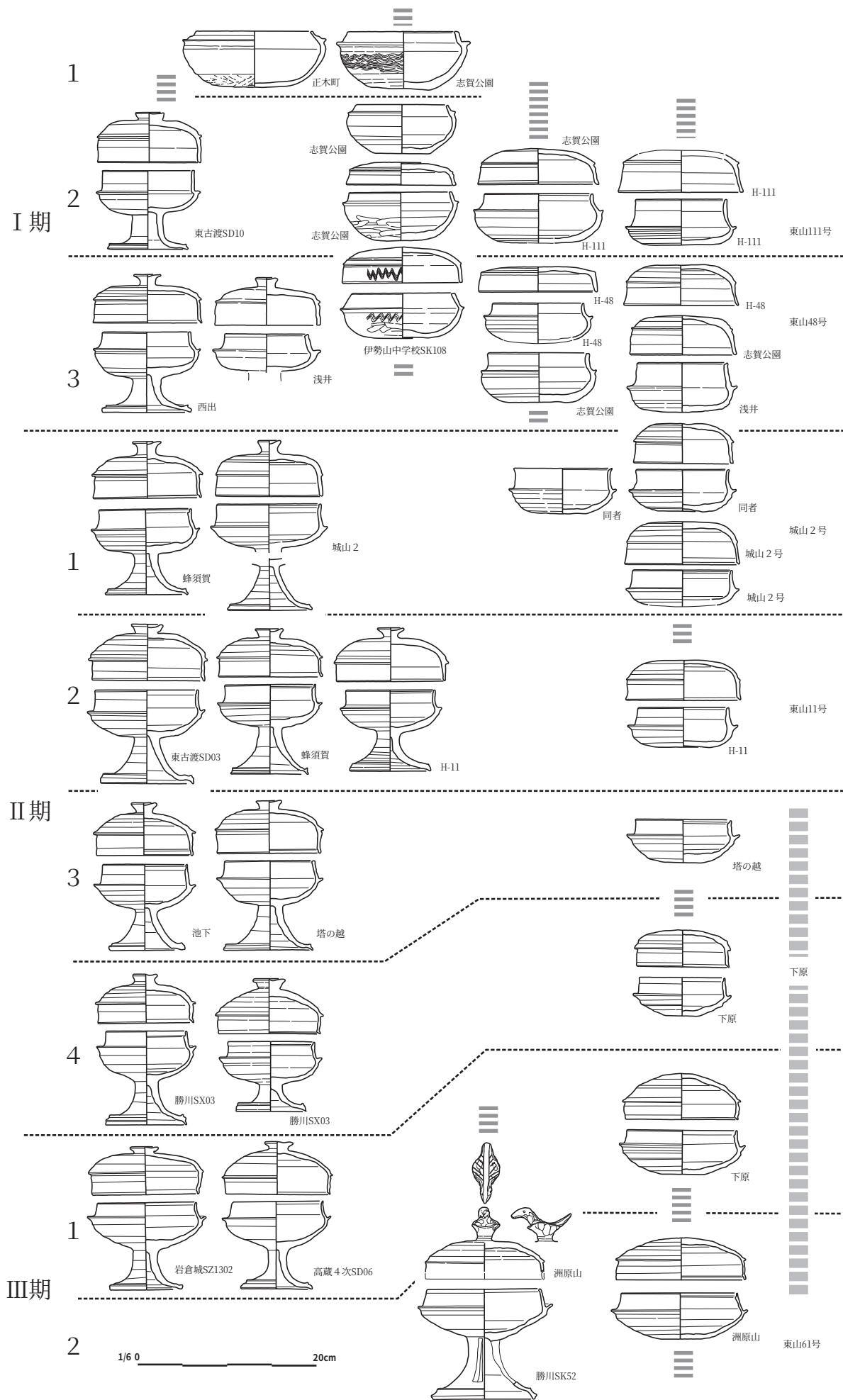


図 15 尾張型須恵器編年表

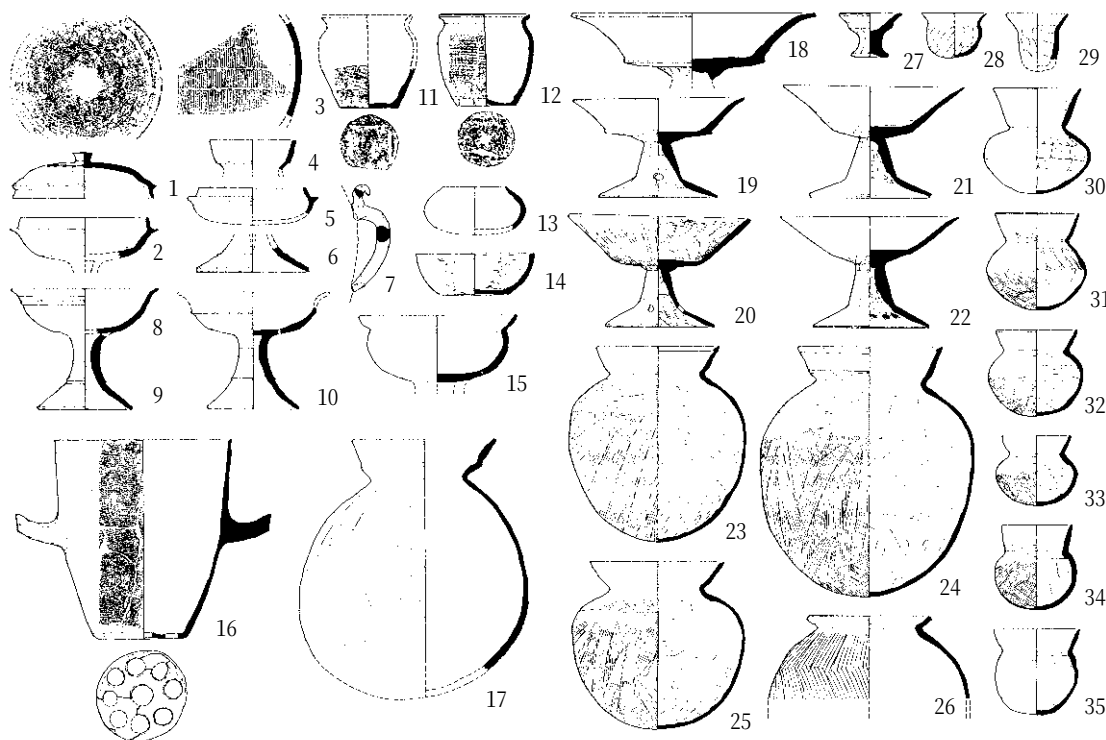


図 16 山田道 2 次 SD2570 出土土器 16・17 は 1／10、他は 1／8

		尾張型須恵器 (猿投窯系)	陶邑窯	志賀公園遺跡		伊勢山中学校遺跡 * 東古渡町遺跡	濃尾平野	畿内
420	松河戸Ⅱ式	1		1 期	S U01		大毛池田95 B a 包含層 門間沼95 E b 福田 S D01・S B04	八尾南井戸 6 上層
		2		2 期	S U13	7 次 S B14 5 次 S B16 5 次 S K120	正木町竪穴住居*	山田道 2 次 S D2570
	宇田Ⅰ式	1	I-1	3 期	S U10 S U14	5 次 S K14	朝日新資料館地点	平城下層 S D6030 上層
		2	I-2 H-111 I-3 (H-48)	4 期	S U12A・B 群 S U12 西・北西 S U11	5 次 S K108 5 次 S K109 5 次 S B19	大須二子山下層* 八王子95 B a NR01 - 3 層 四反畑遺跡 (韓式系)	
500	宇田Ⅱ式	1	II-1 城山 2 II-2 H-11	(5 期)		5 次 S B19 5 次 S B14 * 1 次 S D03	同者包含層 上浜田調査区 2 遺物集中部* 馬引横手 S D31 上層	
		2	II-3 下原 II-4		S D06		勝川62 F NR01 儀町正楽寺 S K05	
	儀町式	III-1 III-2	H-61	(6 期)		5 次 S B01	儀町正楽寺 S K11 岩倉城 S Z1302 土田 S Z11	

表 1 編年対照表

いう尾張型須恵器Ⅱ期前半段階の須恵器と共伴する事例が多々認められる。東古渡町遺跡や馬引横手遺跡などである。また勝川遺跡S X03では宇田Ⅱ式終末段階に尾張型須恵器Ⅱ期4段階の資料が伴う。さらに松河戸Ⅱ式2段階の宇田型甕が、奈良県山田道遺跡2次SD 2570^{※1}の資料群と共伴している事実(図16)からは、後続する宇田Ⅰ式がおおむね陶邑窯のTK73型式に併行する点が想定されるのである。加えて志賀公園遺跡SU14からは、陶邑産と思われる菱形透孔をもつ脚部が共伴している。この形態は、大庭寺遺跡に類似する資料が報告されているが、これらの資料よりやや後出する形態的な特徴が看取できる。したがって宇田Ⅰ式が大庭寺遺跡の段階まで溯る可能性は低いものと考えたい。

以上の考え方にに基づき、尾張型須恵器の編年と宇田様式の併行等を表1に提示しておいた。宇田様式を濃尾平野における5世紀を代表する土器様式としてあらためて設定する。

7 まとめ

煩瑣な説明を重ねることに終始したが、松河戸様式、宇田様式の一応の輪郭を素描した。また、5世紀における土師器編年の整理を前提として、須恵器との時間的併行関係についても現状での整合的な理解を得た。今後は、近年著しく成果の蓄積をみた三河の矢作川流域地域など、濃尾平野周辺地域との対比を試みる機会も用意したい。

さて、ここで提示した編年観に則るなら、松河戸式は屈折脚高杯とS字甕D類、宇田式は宇田型甕と椀状杯部高杯、それに後続する儀町式は長胴甕と須恵器杯類をそれぞれ代表器種とする土器様式とする単純化した図式をもちだすことも可能であろう。しかし宇田様式では、形式の交替が想像以上にドラスティックに達成されたとみるべきで、須恵器生産の興隆を想起せずとも、その背景には生産・流通機構の再編、整備があったものと考えてよい。少なくとも宇田型甕より与えられるイメージから、宇田様式に対して土器形式の退化、衰退という評価を与えることは慎まなければなるまい。

また5世紀における様式の画期は、機能差をともなった土器の一大変革期と評価する声も多く^{※2}、その変革には大陸系の生活様式、制度、思想や価値観の導入が大きくかかわっていたことは疑いない。今後はその変革を可能たらしめた体制、時代背景をダイナミッ

クにえがく必要がある。

本稿は赤塚・早野両者による討議を踏まえてはじめにと6を赤塚が、それ以外を早野が成稿した。土器の機能的側面からの追及、遺跡の格差の問題、集落・古墳の動態との連関など論じ残した課題も数多い。両者の見解の相違にもとづく矛盾点もあろうが、全般にかかるご批判をいただくなかで改善に努めたい。

【謝辞】

本稿作成の過程において、以下の方々のご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げたい。

(以下敬称略・順不同)

木村有作、村木誠、田原和美、植野浩三、森泰通、加納俊介、米田敏幸、内山伸也、井上喜久男、北條猷示、向井裕知、望月精司

※1 西口寿生「山田道2・3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報21』奈良国立文化財研究所

※2 田嶋明人1995「土器と「古墳時代」」『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会